

日本語母語話者が道を教える際の道順説明の反復 —母語場面と接触場面を比較して—

スケンデル=リザトビッチ マーヤ

要 旨

本研究は、日本語の道聞き談話において日本語母語話者が道を教える際の道順説明の反復に着目し、母語場面と接触場面の違いを調べた。分析の際、道を教える側による道順説明の反復の割合及び形式の割合、また先行発話別の割合を調べた。その結果、母語場面と接触場面の両場面において道を教える側による道順説明の反復の割合に違いがなく、道順説明全体の3分の1を占めることが分かった。なお、道を聞く側が学習者の場合、日本語母語話者の道を教える側は、母語場面と異なる道順説明の反復の形式を使用し、また異なる先行発話に続けて道順説明の反復をしていることが明らかになった。このことから、記憶負荷の高い道聞き談話において、インプットの修正の一種類として考えられる道順説明の反復が多く、その重要性が再確認できた。また、語学教科書の会話や聴解教材の開発の際、反復の量だけでなく、反復の形式及び先行発話別の反復に着目する必要性が示唆された。

【キーワード】道聞き談話、反復、談話分析、インプットの修正、自然会話

1. はじめに

語学教科書の会話や聴解教材の開発に向けての第一歩として、自然会話の特徴を解明することが重要である。また、母語場面だけでなく、学習者が実際に体験する接触場面の特徴を見る必要がある。本研究で取り上げる「道を聞く場面」は、初級の語学教科書でよく扱われている場面の一つであり、その元となるのは日常生活でしばしば遭遇する道聞き談話である。

道聞き談話は、段階的な構成を持ち、その中心部分は道順説明であることが、道聞き談話の母語場面の先行研究から明らかにされている (Psathas & Kozloff, 1976; Wunderlich & Reinelt, 1982)。また、道順説明を産出しているのは道を教える側であるが、道順説明は談話参加者である道を教える側と、道を聞く側の相互作用によって成立することが指摘されている (Psathas & Kozloff, 1976)。なお、道を教える側は道を聞く側の記憶負荷を軽減させるため、道順説明を反復することが多くなるということも明らかにされている (Baker et al., 2008)。道を教える側による道順説明の反復 (以下、「反復」と記す) は、道順説明の結束性を高め、重要な情報を目立たせ、道を聞く側の理解を促す道聞き談話の重要な特徴である (Baker et al., 2008)。

一方、語や節の反復はフォリナー・トークの研究

では母語場面にも表れる特徴であるが、接触場面において母語話者による反復が頻出し、普遍的なフォリナー・トークの特徴の一つであると報告されている (スクータリデス, 1981; ロング, 1992)。なお、第二言語習得の研究では、フォリナー・トークの特徴に基づいたインプットの修正を調べた結果、聴解において反復によるインプットの修正は学習者の理解を促すことが示されている (Chaudron, 1983; Pica et al., 1987)。このことから、道聞き談話においても道を教える側による反復は、道を聞く側である学習者の理解促進に役に立つと考えられる。

本来、反復は、母語場面における道聞き談話で頻繁に表れ、重要な役割を担っている。しかし、接触場面において、道を教える側の母語話者が、道を聞く側である学習者にどのような反復をしているか、またその反復は母語場面とどう違うかはまだ明らかにされていない。

そこで、本研究は日本語の道聞き談話の母語場面と、道を教える側が母語話者でかつ道を聞く側が学習者である接触場面を設定し、日本語母語話者が道を教える際の反復に着目して比較分析を行う。

2. 先行研究

反復について、談話分析や第二言語習得の分野では一連の研究の蓄積がある。本節では、道聞き談

話における反復に着目した研究と、第二言語習得における反復のインプットの修正に着目した研究を紹介する。

2.1 道聞き談話における反復

今までの道聞き談話に関する先行研究では、母語場面における道を教える側の発話に着目した研究が多く、道聞き談話を終了する前の段階 (Myers Scotton & Bernsten, 1988; Psathas & Kozloff, 1976; Wunderlich & Reinelt, 1982)、または道順説明の途中でも (Ewald, 2010)、道を教える側は道順説明の発話を頻繁に反復していることが報告されている。しかし、上記の研究では、反復についての分析が行われておらず、道順説明全体においての道を教える側による反復に着目した研究は Baker et al. (2008) のみである。

Baker et al. (2008) は、英語母語場面の道聞き談話において道を教える側による反復の割合、また反復を促す要因を調べた。反復の要因としては、反復に先行する発話 (以下は先行発話とする)、及び話者の親疎関係 (友人関係・初対面) と可視性 (会話相手が見える・見えない) があるとしている。その結果、道順説明の 25% の発話は反復であり、道を聞く側による「情報要求 (info-request)」「不正確な陳述 (incorrect statements)」「途切れの発話 (abandoned utterances)」のそれぞれの発話が反復の出現の可能性を高めることが明らかになった。また、初対面の会話の場合、友人関係の場面に比べて全体的に反復の割合が高くなること、「情報要求 (info-request)」に続く反復が多くなることが分かった。

これらの先行研究から、母語場面の道聞き談話においては道を教える側の反復が多く現れ、反復の全体的な割合と先行発話別の割合は、会話相手の特性によって異なってくることが分かった (Baker et al., 2008)。しかし、会話相手の道を聞く側が学習者である接触場面の場合、反復の割合と先行発話別の割合が大きく変わる可能性があり、母語場面との比較が必要である。なお、Baker et al. (2008) では道を聞く側の正確な陳述 (道順説明の繰り返し) 及びあいづち的発話、そして道を教える側自身の発話といった先行発話については詳しく見ていない。このような発話も反復に影響を与える可能性があり、道を教える側による反復に先行している発話の全体を、調べる必要がある。

2.2 反復によるインプットの修正

反復によるインプットの修正を取り扱った研究には Chaudron (1983)、Pica et al. (1987) と Cervantes & Gainer (1992) がある。

Chaudron (1983) は、聴解の講義における話題の反復が学習者の再認と再生に及ぼす影響を調べた。話題を示す名詞、修辭疑問、類義語、条件節、単独の名詞といった反復の形式を含む聴解の後、再認・再生テストを行った。その結果、単独の名詞反復は他の反復の形式より学習者の再認と再生を促すことが明らかになった。

Pica et al. (1987) は、インプットの修正に加えて、相互作用によるインプットの修正が聴解力に与える影響を調べた。初中級英語学習者を 2 つの条件のグループに分け、組み立てタスクを行った。「修正されたインプット (premodified input)」のグループは、事前に修正された指示を受けた。一方、「相互作用による修正されたインプット (interactionally modified input)」のグループは、修正されていない指示を聞き、読み手の英語母語話者に質問や確認などという相互作用をしながら、タスクを行った。分析の結果、相互作用による修正されたインプットの方では反復が多くなるが、その反復は聴解力を促したことが明らかになった。また、特に、学習者と母語話者の相互作用の一つである「理解チェック (comprehension check)」「確認チェック (confirmation check)」「明確化の要求 (clarification request)」は反復を多く引き起こし、理解の助けになることが分かった。

Cervantes & Gainer (1992) では、日本の大学の学部 1 年生と 4 年生の英語学習者を対象に、単純化された聴解と反復を含む聴解の有効性を比較した。その結果、統語的に単純化された聴解を聞いたグループと、反復を含むより複雑な聴解を聞いたグループの得点に、有意差が見られなかったと報告している。このことから、反復による聴解の修正を行えば聴解を単純化する必要がなくなると考察している。

これらの先行研究から、反復によるインプットの修正が学習者の理解を促すことが明らかになった。また、反復の形式はその有効性に影響を及ぼすと報告されている (Chaudron, 1983)。しかし、自然会話の観点から反復によるインプットの修正に着目した研究は、管見の限り見当たらない。さらに、相互作用のできるタスクでは学習者が理解チェック、確認

チェック、明確化の要求などによって反復を引き起こすと示されたが (Pica et al., 1987)、それ以外の相互作用は明らかにされていない。

Baker et al. (2008) の結果からは、日本語の道聞き談話でも、道を教える側による反復が多く出現することが予測されるが、道順説明に含まれる反復の割合はどれくらいか、また母語場面と接触場面との相違についてはまだ明らかにされていない。また、反復の形式によって効果が異なることが指摘されているが (Chaudron, 1983)、自然会話ではどのような形式が使われるか、そして母語場面と接触場面の違いはあるかを見る必要がある。Baker et al. (2008) と Pica et al. (1987) はいくつかの先行発話に続く道を教える側の反復を調べた。しかし、この2つの研究は、道を聞く側による道順説明の繰り返し、及びあいづちの発話に続く道を教える側の反復を、分類に入れていないため、母語場面と接触場面を比較しながら、更に詳しく調べる必要がある。

そこで本研究は、日本語の母語場面と接触場面の道聞き談話を比較しながら、日本語母語話者が道を教える際の反復の特徴を明らかにすることを目的とする。

3. 研究課題

本研究では、以下のように研究課題を設定する。

日本語母語話者が道を教える際の日本語の道聞き談話において、

RQ1 道を教える側による反復の割合は、母語場面と接触場面で異なるか。

RQ2 道を教える側による反復の形式の割合は、母語場面と接触場面で異なるか。

RQ3 先行発話別の道を教える側による反復の割合は、母語場面と接触場面で異なるか。

4. 研究方法

4.1 調査対象者及び調査資料

本調査は、2012年7月～10月と2015年7月～2016年5月に都内の某大学のキャンパス内で行われた。会話参加者について、母語場面は、道を教える側の日本語母語話者29名(全員女性、以下DGN¹⁾)と道を聞く側の日本語母語話者29名(女性14名、男性15名、以下JNS)である。接触場面は、道を教える側の日本語母語話者27名(全員女性、以下DGC)と道を聞く側の日本語学習者27名

(女性17名、男性10名、以下NNS)である。両場面では、道を教える側は、調査が行われる大学に所属している学部生・大学院生であり(平均年齢21.6歳)、道を聞く側は、その大学に来たことのない他大学の学部生・大学院生(平均年齢21.2歳)、及び欧米(18名)とアジア(9名)の留学生²⁾である(平均年齢23.8歳)。会話参加者のペア同士はお互い初対面である。NNSの日本滞在歴は1年以内であり、所属している大学の日本語中級クラスを受講している。また、SPOT ver 2³⁾の平均得点は47.7点(65点満点)であるため、NNSは日本語中級レベルであると判断した。

調査資料となったのは、母語場面29組と接触場面27組(計56組)の文字化した会話データである。

4.2 調査手順

本調査の手順は以下の通りである。道聞き談話の流れがルートの長さや形に大きく左右されると考えられるため、説明されるルートを一つにした。道を聞く側は控室で口頭での説明を受け、ICレコーダーを装着して待機する。道を教える側は出発点のところで口頭で説明を受けて待機する。道を聞く側は出発点のところまで行って、道を教える側と会話をする。会話が終わった後、道を聞く側は目的地まで行く。道を聞く側は全員、目的地までたどり着いた。

4.3 分析方法

4.3.1 道を教える側による反復の認定

まず、本調査の道を教える側による道順説明の発話をすべてAllen(1997)の分類に沿って、行動や移動の動詞を含む「指示(directives)」と、存在動詞「アル」や視覚的動詞「ミエル」を含む「記述(descriptives)」に大別し、その総数を道順説明の発話総数とする。次に、道を教える側による反復を認定する。

Pica et al. (1987) と Baker et al. (2008) に倣い、本研究の道を教える側の反復の定義は、既出發話と道順上の同じ命題を持ち、既出發話の名詞、動詞、形容詞、副詞という内容語を反復する(完全一致反復、部分的反復、言い換え、意味的反復、補足反復を含む)発話とする。反復の位置に関して、元となる発話の直後に後続する発話も、離れた位置で出現する発話も含む。この定義に沿って道を教える側による反復を認定し、道順説明の発話総数に含まれる割合を計算する。

【会話例 1】⁴ 母語場面 24

- 14 DGN でそのまままっすぐいくと
 →15 DGN 左手に えっと食堂があるので
 16 DGN 食堂の右側に小さな階段があるので
 17 JNS うんうん
 →18 DGN そこをおりてもらいます
 19 JNS はい
 →20 DGN で すると 左手に生協があつて
 21 JNS ひだり [h h h はい
 →22 DGN [それで生協があつて
 →23 DGN あ h 食堂があつて
 [おりる 生協があつて
 24 JNS [しょ - おり - があつて
 25 DGN ちょっと右斜め前に階段があつて
 またおりる

会話例 1 から分かるように、元の発話となるのは、道順説明をするとき、道を教える側が新情報として提供した発話である。会話例 1 では DGN の発話 15、18、20 にあたる。反復は、元の発話の直後または離れた位置で元の発話と道順上の同じ命題を持つ、道を教える側の発話である。会話例 1 では DGN の発話 22 と 23 に含まれる「それで生協があつて」「食堂があつて」「おりる」「生協があつて」という発話を 4 回の反復として数える。

4.3.2 道を教える側による反復の形式

道を教える側による反復の形式に関しては、Pica et al. (1987) と中田 (1992) に倣い、以下のカテゴリーに分類する。元の発話と反復はどちらも道を教える側の発話である。

①完全一致反復：ほぼ同じ形式で反復する。

元の発話：「階段を下ります」

反復：「階段を下りて」

②部分的反復：発話の一部をほぼ同じ形式で反復する。

元の発話：「また二 三段ぐらいの階段があるので」

反復：「でまた階段があるので」

③言い換え：一部の言葉を言い換える。

元の発話：「でまっすぐ進んでもらうと」

反復：「h h h なのでまっすぐ行ってもらって」

④意味的反復：内容のまとめを含む反復、意味を保持する反復。

元の発話：「階段があるんですけど 下においてる」

反復：「階段を下においてて」

⑤補足反復：発話の全部あるいは一部をほぼ同じ形式で反復するが、反復の際に何かを付け足す。

元の発話：「そしたら右に進みます」

反復：「で右ず：っと直進してもらって」

4.3.3 先行発話別の道を教える側による反復

Pica et al. (1987) と Baker et al. (2008) の分析枠組を修正・加筆し、道を教える側による反復を表 1 に示されているカテゴリーに沿って分類する。

本研究の分析対象は道を教える側による反復であるが、先行発話別の道を教える側による反復の割合を算出するためには、まず先行発話を認定する必要がある。先行発話は道を教える側の反復に先行する、道を聞く側または道を教える側自身の発話とする。あいづち的発話の先行発話を認定するために小宮 (1986) の発話の分析枠組を援用した。

この枠組みに分類される発話以外に、「で」「それで」などの会話の進行を促進する表現と、「難しいな」のような相手の発話を評価する発話が観察されたが、数が少ないため、「道を聞く側のその他の発話に続く反復」に含める。表 1 の a.~d.のカテゴリーは道を聞く側の発話に続く反復であり、e.のカテゴリーのみは道を教える側自身の発話に続く反復である。

表 1. 先行発話別の道を教える側による反復（小宮, 1986; Pica et al., 1987; Baker et al., 2008 を参考に作成）

先行発話別の反復	定義	会話例
a.道を聞く側の情報要求・確認要求に続く反復	先行する発話は道を聞く側による質問と、聞き返し、反復要求である	DGC: え：ずっとまっすぐ進むと 正面にガラス張りの一階建ての食堂 [が NNS: [え↑

	質問：相手の発話に対しての質問 聞き返し：上昇調で相手の発話の一部を繰り返したもの 反復要求：道順説明の反復を要求する発話	あちよつとしょ - しょうめいの：↑ 【聞き返し】 DGC: え：まっすぐ進み【反復】
b.道を聞く側の道順説明の繰り返しに続く反復	先行する発話は道を聞く側の道順説明の繰り返しである 道を聞く側の道順説明の繰り返し：道を聞く側が話し手として道順説明を繰り返している発話であり、正確な・不正確な・途切れた道順説明の繰り返しを含む	JNS: で 行くと グラウンドみた 【いなが見え - 見えて【道を聞く側の道順説明の繰り返し】】 DGN: [あh 正面に はい グラウンドが見えて【反復】*] *反復の元の発話が離れた位置にある
c.道を聞く側のあいづち的発話に続く反復	先行する発話は道を聞く側によるあいづち的発話である 感声的表現：指す概念を持たず、それ自体で直接に話し手の感情を表す表現 「はい」「うん」 概念的表現：ももとは概念を表す言語形式であるが、感動詞的にも使われる表現 「なるほど」 繰り返し：話し手の発話の一部を繰り返したものの	DGN: ちょっと右斜め前に階段があってまたおりる JNS: おりる h h h h h h【繰り返し】 DGN: おります【反復】
d.道を聞く側のその他の発話に続く反復	先行する発話は道を聞く側の上記以外の発話である 進行促進：会話の進行を促進する表現 評価：相手の発話を評価する発話	NNS: ああ：難しいんですね：h h 【評価】 DGC: h h 曲がって：【反復】* *反復の元の発話が離れた位置にある
e.道を教える側自身の発話に続く反復	先行する道を聞く側の発話がなく、道を教える側自身の発話である	DGC: そしたら (.) 机と椅子がいっぱいある食堂があります【道を教える側自身の発話】 DGC: でその：(.) その食堂があつて【反復】 DGC: の右側を - の階段を下りてください

5. 結果

5.1 道順説明に含まれる道を教える側による反復

表2を見ると、日本語の道聞き談話の母語場面と接触場面における反復の割合は、それぞれ 32%と 33%であり、両場面に違いは見られなかった。このことから、両方の場面における道順説明の3分の1は反復であると言える。

表2. 道順説明に含まれる道を教える側による反復の割合（回数）

	反復	発話総数
母語場面	32% (206)	100% (645)
接触場面	33% (202)	100% (621)

5.2 道を教える側による反復の形式

表3に反復の各形式が反復に占める割合を示す。まず完全一致反復の割合について、母語場面では 21.8%、接触場面では 26.7%であり、接触場面の方がやや高くなっている。次に、部分的反復では最も大きな差が見られ、母語場面の 42.7%に対し、接触場面の割合は 30.7%にとどまっている。さらに、言い換えに関して、母語場面の割合は 14.6%であり、接触場面の割合は 23.8%に上る。最後に、意味的反復と補足反復について、両場面には違いがなく、意味的反復の場合、母語場面は 14.6%、接触場面は 13.9%であり、補足反復の場合、母語場面は 6.3%、接触場面は 5.0%である。

表 3. 道を教える側による反復の形式の割合（回数）

	完全一致反復	部分的反復	言い換え	意味的反復	補足反復	合計
母語場面	21.8% (45)	42.7% (88)	14.6% (30)	14.6% (30)	6.3% (13)	100% (206)
接触場面	26.7% (54)	30.7% (62)	23.8% (48)	13.9% (28)	5.0% (10)	100% (202)

5.3 先行発話別の道を教える側による反復

表 4 は先行発話別の道を教える側による反復が占める割合を示したものである。道を聞く側の情報要求に続く反復について、母語場面では 11.2% の反復が道を聞く側の情報要求によって引き起こされた。一方、接触場面の場合、その割合は 25.2% に上る。

道を聞く側の道順説明の繰り返しによって引き起こされた反復に関して、母語場面の場合、このよう

な繰り返しは 53.9% を占める。一方、接触場面の割合は 23.8% でその半分である。

道を聞く側のあいづち的発話に続く反復は、母語場面では 27.2%、接触場面では 35.6% を占める。

最後に、道を教える側自身の発話に続く反復について、母語場面は 6.3%、接触場面は 12.9% であることが分かった。

表 4. 先行発話別の道を教える側による反復の割合（回数）

	情報要求・確認要求	道順説明の繰り返し	あいづち的発話	その他の発話	道を教える側自身の発話	合計
母語場面	11.2% (23)	53.9% (111)	27.2% (56)	1.5% (3)	6.3% (13)	100% (206)
接触場面	25.2% (51)	23.8% (48)	35.6% (72)	2.5% (5)	12.9% (26)	100% (202)

6. 考察

以上の結果をまとめると、まず、RQ1 の道順説明に含まれる反復の割合には違いが見られなかったが、形式と先行発話別の割合は、母語場面と接触場面において異なる特徴が確認された。次に、RQ2 の形式に関しては、母語場面の場合、部分的反復が多くなるのに対し、接触場面においては、完全一致反復と言い換えが多くなることが分かった。最後に、RQ3 の先行発話別の割合に関しては、母語場面の場合、反復は主に道を聞く側の道順説明の繰り返しによって引き起こされ、接触場面の割合の 2 倍であることが分かった。一方、接触場面の場合、道を聞く側のあいづち的発話に続く反復が最も多く、また道を聞く側の情報要求・確認要求に続く反復と、道を教える側自身の発話に続く反復の割合が、母語場面より 2 倍高くなることが明らかになった。これらを踏まえ、考察を行う。

6.1 道順説明に含まれる道を教える側による反復

RQ1 では、母語場面と接触場面の道順説明に含まれる、道を教える側による反復の割合を調べた結果、両方の場面に違いがなく、反復が道順説明の 3 分の 1 を占めることが分かった。Baker et al. (2008) は道順説明における反復の割合が高い理由について、他の談話と比べて、道聞き談話の場合、

道を聞く側が道順説明を理解し、間違えないように記憶する必要があるからであると指摘している。また、Baker et al. (2008) ではすべての場面の反復は 25% にとどまるが、初対面の場面のみを見ると、27.8% に上り、友人同士の場面より高いことが分かっている。本研究の会話参加者は初対面であるため、道を教える側による反復の割合がより高くなったと考えられる。

また、フォリナー・トークの研究では母語場面に比べて、接触場面においての反復が多くなると指摘されているが（ロング, 1992）、本研究の記憶負荷の高い道聞き談話では、先行研究と異なり、両場面の反復が多く、差が見られないという結果になった。Pica et al. (1987) は、反復が多くなるほど理解が促されるのではなく、反復が相互作用によって必要なところに出現し理解を促すと指摘している。そのため本研究の接触場面において、道を教える側は必要以上に反復の量を増やさず、反復の形式及び相互作用によって反復箇所を変更していると考えられる。

6.2 道を教える側による反復の形式

反復の形式に関して、まず完全一致反復の割合は接触場面の方がやや高いのに対し、母語場面では部分的反復の割合が接触場面上を回ることが分かった。一方、言い換えも接触場面の割合の方が高いという

結果になった。最後に、意味的反復と補足反復においては違いが見られなかった。

まず、完全一致反復と部分的反復は両方とも元となる発話とほぼ同じ形式を使うため、両方とも「談話の結束を示す」「重要な情報を目立たせる」「記憶負担を軽減させる」といった理由から使われると言える（中田, 1992; Baker et al., 2008）。しかし、道を聞く側が NNS の場合、同じ部分の反復であることを示すために、完全一致反復が使われると考えられる。一方、道を聞く側が JNS の場合には、部分的反復であっても、同じ部分の反復であることに気付く可能性が高いので、部分的反復がより多く使われたのだろう。

言い換えと補足反復について、中田（1992: 299）は「理解補助的なくり返しの使用に向いている」と述べている。本研究でも、NNS の理解を促すために DGC は説明を反復するとき、表現を少し変えたりして、言い換えの割合が母語場面より高くなっていると推測される。一方、母語場面の場合、DGN は JNS の理解に問題がないと考え、言い換えではなく、形式を保つ完全一致反復や部分的反復を用いるのであろう。しかし、Chaudron（1983）の結果では言い換えより形式を保つ反復の方が有効であったため、接触場面の場合、言い換えは逆に記憶の負担になる恐れがあることが示唆される。補足反復に関して、道を教える側は反復をするとき、何らかの情報を補足し、情報を強調したり、特定しやすくしたりしているという、言い換えとはまた異なる効果があるため、両場面では違いがないと考えられる。

最後に、意味的反復は「発言・話題の収束において効果を発揮する」（中田, 1992: 299）といった談話展開上の機能を持つため、両場面で同じ理由で使われ、同じ割合で使われている。

6.3 先行発話別の道を教える側による反復

RQ3 の先行発話別の割合に関しては、母語場面の場合、半分以上の反復は道を聞く側の道順説明の繰り返しに続く一方で、接触場面の場合、道を聞く側のあいづち的発話に続く反復が最も多く、また道を聞く側の情報要求・確認要求に続く反復と道を教える側自身の発話に続く反復の割合が、母語場面の2倍という母語場面と接触場面の異なる特徴が観察された。以下は、会話例を挙げながら、両場面の特徴とそれぞれの先行発話別の反復のカテゴリーについて考察を行う。

6.3.1 道を聞く側の情報要求・確認要求に続く反復

道を聞く側の情報要求・確認要求に続く反復について、接触場面の割合は反復の4分の1を占め、母語場面はその割合の半分である。Baker et al.（2008）は、質問などの情報要求の中には新しい情報の要求が含まれるため、情報要求によって引き起こされる反復の割合が低いとしている。本研究の母語場面でも、同じ理由で情報要求に続く DGN の反復が少ないと考えられる。一方、接触場面において、道を聞く側の情報要求に続く反復の割合が倍近くに上昇している理由としては、まず反復を求める NNS の聞き返しと「もう一度ください」(ママ) のような発話が観察されたことが挙げられる。また、Baker et al.（2008）の初対面の会話相手の場合、道を聞く側の情報要求に続く反復が多くなり、会話相手によって先行発話別の反復の割合が変わってくる可能性がある指摘されている。同様に、本研究の接触場面では、会話相手が NNS の場合、新情報の要求であっても、DGC はそれを説明が足りなかったサインとして捉え、反復をしていると考えられる。会話例2はその例である。

会話例2は、接触場面の道を聞く側の情報要求・確認要求に続く反復の例である。発話30「えっと： そうですね」で、DGC は次に来るステップに迷っている様子を見せる。それに対して NNS は上昇調の「また右↑h」という質問による情報要求・確認要求で次のステップを確認している。それに対して DGN は「はい」か「いいえ」の応えの代わりにまた最初から反復をする。

【会話例2】 接触場面 27：道を聞く側の情報要求・確認要求に続く反復

- 30 DGC えっと： そうですね
→31 NNS また右↑h
32 DGC み-え：と (1) 階段下りhて
右に行つて
33 DGC 道なりに行つてもらふと
34 DGC えっと：
35 NNS はい
36 DGC (1) 右手に見えます

6.3.2 道を聞く側の道順説明の繰り返しに続く反復

母語場面の場合、半分以上の反復が道を聞く側の道順説明の繰り返しによって引き起こされ、道を教

える側は、道を聞く側の道順説明の繰り返しを確認要求や反復要求として捉えていると考えられる。

会話例 3 では、JNS が発話 42、43 で道順説明の繰り返しを始めると、DGN は発話権を取って、反復を始める。道を聞く側と道を教える側がともに反復をし、共話のような反復の例であると言える。

【会話例 3】 母語場面 17：道を聞く側の道順説明の繰り返しに続く反復

- 40 JNS [えっとですね
41 DGN [このまま
→42 JNS そこまっすぐ行って
→43 JNS [ずっと [行くと
44 DGN [で [行くと
45 DGN 階段 - 食堂が [あって
46 JNS [はい
47 DGN その右手に階段があるんで
48 JNS はい
49 DGN そこ [下りてもらったら
50 JNS [下りたら
51 DGN 理学部棟がある
52 JNS 理学部棟 h h あって

一方、接触場面において道を聞く側の道順説明の繰り返しに続く反復は、母語場面の割合の半分である。その理由として、道順説明の繰り返しをするのが難しいため、そもそも NNS の道を聞く側の道順説明の繰り返しが少なく、またそれによって DGC の反復も少なくなっていると考えられる。NNS は道順説明の繰り返しより、質問や聞き返しによって反復を引き起こそうとしていると推察される。

6.3.3 道を聞く側のあいづち的発話に続く反復

道を聞く側のあいづち的発話に続く反復の割合には、違いが見られなかったが、接触場面の場合は、他の先行発話に続く反復に比べて割合が最も高い。あいづち的発話は「聞いているという信号」と「理解しているという信号」といった機能を持つが、「はい」などのハ系あいづち詞の場合にはこれら 2 つの機能のうちいずれかが、はっきり分けられないことが多い (堀口, 1988)。そのため、道を教える側は、念のために積極的に反復をすることが考えられる。さらに、Baker et al. (2008) が指摘したように、この場合も道を教える側は結束性と説明の有効性を高めるため、あるいはあいづちに伴う表情などの非

言語的な行動を、理解が不十分であるというサインと捉え、反復をしている可能性もあるだろう。

会話例 4 の場合、発話 26 では道順説明がいったん終わったあと、NNS は発話 27 でただ「はい」というあいづち的発話をしている。道順が最初から最後まで説明されたあとには、「はい」といった曖昧な応答ではなく、道順説明を理解したかどうかははっきり示す発話が求められると考えられる。この会話ではそういう応答がないため、DGC は発話 28、31、33、35 でまた最初から道順説明を反復している。

【会話例 4】 接触場面 9：道を聞く側のあいづち的発話に続く反復

- 26 DGC (.)そして しばらく行くと講堂の
前に行きます
→27 NNS はい
28 DGC まゝ - んで: まずあがって: (.)
[まっすぐ行って:]
29 NNS [はい
30 NNS はい
31 DGC ガラス張りの建物の右側の階段を
おりて
32 NNS はい
33 DGC でまた次の階段おりてまっすぐ行って
34 NNS はい
35 DGC 右に (.) 歩けば: 着きます

6.3.4 道を教える側自身の発話に続く反復

道を聞く側ではなく、道を教える側自身の発話に続く反復は、道順説明の結束性を保つために使われると考えられる。また、言葉探しなどの何らかの理由で道順説明が中断され、再び説明が始まるときに使われる例も見られた。会話例 5 はその例である。

会話例 5 では道を聞く側の発話がなく、DGN は言葉を探しているため、いったん道順説明を中断したあと、再び道順説明を始めるとき、発話 18 で「h h なんと言ったらいいの」と言葉探しの発話をした後で、発話 17 に含まれている中断前の説明を発話 19 で反復している。

【会話例 5】 母語場面 18：道を教える側自身の発話に続く反復

- 11 DGN で食堂の右脇に
12 DGN 小さい えっと短い 階段があって

- 13 JNS 右脇に [はい]
 14 DGN [はい]
 15 DGN それをくだります
 16 JNS はい
 →17 DGN で くだったら
 →18 DGN (.) えっと : : (.) しょく -
 hh なんと言ったらいいの
 19 DGN えっとくだったら右側に〇〇の ATM
 があるんですけど
 20 JNS はい

接触場面の場合、このような道を教える側自身の発話に続く反復の割合が2倍になるという結果になった。それは相手がNNSであるため、DGCは道順説明の結束性を高め、道順説明をより分かりやすくしようとしているからだと考えられる。

7. まとめと今後の課題

本研究では、日本語母語話者が道を教える際の反復に着目し、母語場面と接触場面の比較を通して、道順説明に含まれる反復の割合及び反復の形式の割合、先行発話別の反復の割合を調べた。その結果、まず両場面において道を教える側による反復の割合には違いがなく、道順説明全体の3分の1を占めることが分かった。このことから、Baker et al. (2008) と同じく、記憶負荷の高い道聞き談話において、道を教える側による反復が多く現れており、反復が重要な役割を担っていることが分かる。本研究の道聞き談話の話者は、お互いに初対面のため、両方の場面において反復の割合が高くなったと推測できる。次に、反復の形式の割合と先行発話別の反復の割合に関して、違いが観察された。反復の形式について、会話相手がJNSの場合、道を教える側は理解に問題がないと判断し、部分的反復を多くする。一方、会話相手がNNSの場合、同じ部分の反復であることを示すため、道を教える側は完全一致反復を多く使用すると考えられる。また、接触場面では言い換えの割合も多くなることが判明したが、言い換えがNNSの理解を促すかどうかは疑問が残る。先行発話別の反復の割合に関して、母語場面の場合、道を教える側は、ほとんどの道を聞く側の道順説明の繰り返しを確認要求として捉え反復をする。道を聞く側の正確な道順説明の繰り返しを見ていないBaker et al. (2008) と、一部異なる結果になった。

それに対し、接触場面の場合、まず母語場面に比べて道を聞く側の情報要求・確認要求に続く反復が多くなる。このことから、Pica et al. (1987) と同じく、NNSにとって情報要求と確認要求によって引き起こされた反復は、重要な助けであると言える。また、道を教える側は談話の結束性や説明の有効性を高めるため、あいづち的発話、道を教える側自身の発話に続けても積極的に反復を多く使うと考えられる。

以上のことから、日本語の母語場面と接触場面の道聞き談話においても、反復が多く出現し、重要な役割を果たすことが再確認できた。また、会話相手がJNSかNNSかによって、日本語母語話者の道を教える側は反復の形式を調整し、異なる先行発話に続けて反復をしていることが示された。教科書の会話や聴解タスクを開発する際、「道を聞く場面」における反復の量及び反復の形式、また反復を引き起こす発話を考慮する必要があるだろう。このような日本語母語場面に加えて、NNSが実際に体験する日本語接触場面から得られた知見は、教材の開発に応用できると期待される。

今回の分析は、反復の割合と、反復の形式の割合、先行発話別の反復の割合について検討したが、先行発話によって道を教える側が反復の形式を変えている可能性がある。教材開発の際、このような点も重要になると考えられるため、今後の課題としたい。

注

1. DGNはDirection Giver Native situation、JNSはJapanese Native Speaker、DGCはDirection Giver Contact situation、NNSはNon-Native Speakerという意味である。
2. 欧米の留学生はアメリカ人1名、イギリス人2名、イタリア人3名、オーストラリア人2名、オーストリア人1名、クロアチア人2名、ドイツ人1名、フランス人3名、ポーランド人2名、マケドニア人1名であり(計18名)、アジアの留学生はタイ人4名、台湾人2名、ベトナム人3名である(計9名)。
3. SPOT ver 2 (Simple Performance-Oriented Test) は旧日本語能力試験の3級から1級を識別できる、筑波大学留学生センターで開発されたテストである。
4. 会話例はすべて本調査で見られた例である。斜字は元の発話、波線は反復、太字は先行発話を示す。会話例で用いた記号は以下の通りである。
 「h」呼吸音 「(数字)」沈黙秒数
 「:」音の引き延ばし 「(.)」1秒以下のポーズ
 「↑」上昇調 「-」中断された発話
 「[」発話の重なり開始 「○」固有名詞の省略箇所

謝辞

調査にご協力くださった学生さんの皆様、貴重なご助言をくださった佐々木泰子先生、査読者の方々、ネイティブチェックをしてくださった方々、そして佐々木ゼミの皆様にご心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 小宮千鶴子 (1986) 「あいづち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』(3), 43-62.
- スクータリデス・アリーナ (1981) 「外国人の日本語の実態 (3) 日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』(45), 53-62.
- 中田智子 (1992) 「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究所 104 研究報告集』13, 267-301.
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』(64), 13-26.
- ロング・ダニエル (1992) 「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォリナー・トークを中心に」『日本語学』11(13), 24-32.
- Allen, G.L. (1997). From knowledge to words to wayfinding: Issues in the production and comprehension of route directions. In S. Hirtle and A. Frank (Eds.), *Spatial information theory: A theoretical basis for GIS*. Berlin: Springer-Verlag, 363-372.
- Baker, R.E., Gill, A.J. & Cassell, J. (2008). Reactive redundancy and listener comprehension in direction-giving. *Proceedings of the 9th SIGdial workshop on discourse and dialogue*, 37-45.
- Cervantes, R. & Gainer, G. (1992). The effects of syntactic simplification and repetition on listening comprehension. *TESOL Quarterly*, 26(4), 767-770.
- Chaudron, C. (1983). Simplification of input. Topic restatements and their effects on L2 learners' recognition and recall. *TESOL Quarterly*, 17(3), 437-458.
- Ewald, J. (2010). "Do you know where X is?": Direction-giving and male/female direction-givers. *Journal of Pragmatics*, 42(9), 2549-2561.
- Myers Scotton, C. & Bernsten, J. (1988). Natural conversations as a model for textbook dialogue. *Applied Linguistics*, 9(4), 372-384.
- Pica, T., Young, R. & Doughty, C. (1987). The impact of interaction on comprehension. *TESOL Quarterly*, 21(4), 737-758.
- Psathas, G. & Kozloff, M. (1976). The structure of directions. *Semiotica*, 17(2), 111-130.
- Wunderlich, D. & Reinelt, R. (1982). How to get there from here. In R.J. Jarvella & W. Klein (Eds.), *Speech, Place, and Action*. John Wiley and Sons, 183-201.

すけんでる＝りざとびっち まあや／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
maja_skender@yahoo.co.jp

Repetition of Route-description by Japanese Native Speaker Direction-giver: A Comparison of Contact and Native Situations

SKENDER-LIZATOVIC Maja

Abstract

This paper focuses on repetitions produced by Japanese native speaker direction-givers in Japanese native and contact situations. The percentage of repetitions in route-direction, the percentage of forms of repetition, and the percentage of repetitions in response to different preceding utterances was analyzed. The results showed that in both situations the repetitions make out a third of the route-direction. From this we can say that in a high memory load situation such as direction-giving discourse the percentage of input modifications in the form of repetitions is high, which confirms the importance of this kind of modification. Furthermore, it was found that Japanese native speaker direction-givers adjust the forms of repetition and the amount of repetitions in response to different preceding utterances depending whether the direction-asker is a Japanese native speaker or a Japanese language learner. The findings suggest that, when developing textbook dialogues or listening materials, in addition to the amount of repetition there is a need to consider the form of repetition and the placement of repetition according to the preceding utterance as well.

【Keywords】 direction-giving, repetition, discourse analysis, input modification, naturalistic conversation

(Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)